

受験は運命です。そうでなければ運です。いずれにせよ私たちにはどうすることもできないものです。できることといえば勉強することくらいしかありません。思うに、運命が、あるいは運が少しでもこちらを向いたときに、何があってもそれを手放さないようにすること、これが受験勉強というものです。このことが、私が受験勉強をするなかで、確信したことです。ここでは運命だとか運だとかは、本番でどの分野が出るか、風邪にかかるか否か、といったことよりもっと抽象的で精神的な意味を持ちます。つまり一定の分母に対して、そのうち勉強でどれだけを網羅できるかといった数学的な話ではないということです。女神が微笑むかどうか。そこに、確率をどれだけ上げられるのかという議論はナンセンスです。人事尽くして天命を待つ、でしょうか。尽くさずとも微笑まれる人はもちろんいるでしょうし、逆もまた然りです（微笑み、すなわち合格が必ずしも善なわけではないという天命の解釈は、真実ではありますが、受験生にとっては目標の破壊に等しく、この場では無意味とします）。私が言いたいのは、人事を尽くすことと天命は完全に独立しており、天命が下ることと自分がそれをものにできることもまた同様に独立しているということです。そして人事はその天命をものにするためにあるのです。

人事を尽くすことを前提として話を進めます。何よりもまず、天命を待つことは、人事を尽くすことよりも難しいです。そして人事尽くしても天命は変わらないのに、天命を待ち誤ると人事を尽くせなくなります。ではどうやって待てばよいのでしょうか。不確実性という点で、明確に枝分かれした将来を待つときと、海路の日和を待つときとは本質的に異なります。だから天命を待つとは、ただ寝て待つように簡単にはいきません。そこで、二つの体勢が有用になってきます。

ラディカルな体勢。人事の尽くし方ともかかわってきますが、まずは受験勉強などしないことです。何のために勉強をするのか。それを明確にしたときに受験勉強を辞めることができます。第一、受験のためだけに尊い青春を虚しくするのはあまりに悲しいことです。一度自分のやりたいことを見つめることから始めるとよいと思います。それを核に抱いたとき、好きだった世界が新たな姿を見せたり、遠すぎた世界には裏側から手が届いたり、嫌いだった世界に被せてきた幕がおのずから剥がれてきたり、といったことがいきなり起こり始めます。好奇心に従い、それとその周辺を深くすることができたとき、いやできなくとも深くしようという志を抱いたときには既に、天命など副産物に過ぎません。もちろん私は受験勉強をしましたし、天命に心惑わせることもありましたが、やりたいことをやってきたのだという自信の手前の自負のようなものが、心のどこかでは天命など知ったことではないと思わせてくれました。これは決して綺麗事などではありません。大切な待ち方の一つです。

もう一つは感謝。これは人事を尽くすために正しく待つ「方法」などという恣意の対象にするべきではないとすら思われます。人間に必要不可欠なものです。どうしようもない災難にあったことのない私に、本当の苦しみを知らない私に、苦境の中での感謝を説く資格はないかもしれません。だから私が唯一語れるのは、恵みへの感謝を絶やさないこと。自分が受験できること、その志望校が自分の心に適っていること、教育を受けられること、その水準が高いこと、多くの人々の支援と応援、そしてそもそも自分が今日生きてあること、どのひとつも自分の努力で勝ち取ったものではありません。幸福にも無条件で与えられたものです。そのことを考えるとき、自らの行動はおのずと決まってきます。その環境にあって寝て待つ人はもちろん馬鹿です。ただ天命を案じる人、僕は受かるかしら云々する人のその心情は、私としては共感してもしきれませんが、同じくらい馬鹿げたものです。感謝が大きくなればなるほどそれは恩返ししなければならぬという重圧に変わります。それは避けられない事実です。しかしそこで案じるのではなく、もうひとつ感謝を重ねて心を決められるかどうか。心の持ち方が精神の生き死にを左右します。精神の死んだ人に恩返しは難しいでしょう。あえて低次元な意味づけをすると、感謝によって人は心の安寧を手にすることができるのです。天命に惑わせられない心の在り方を見つけられるのです。いややはりこんな意味づけはするべきではありません。感謝は自分のためにするものではありません。

以上が、私の伝えたいことです。読んでくださってありがとうございました。